

時評

日本の対ソ外交戦略

中な

嶋しま

嶺みね

雄ゆう

(東京外国語大学教授)

ゴルバチョフ体制下のソ連が新しい出発をしてから一年半を経たとき、ゴルバチョフ書記長は、全世界に向かって、その哲学と世界認識を全面的に提起する機会を得た。ソ連の当面の国内政策と外交政策を包括的かつ具体的に語った去る七月二十八日のウラジオストク演説がそれである。加えて、ゴルバチョフ書記長がソ連の最高指導者の史上初めての訪問として来日するという外交日程も、あと数カ月に迫ってきている。

わが国としては、戦後外交の最後の懸案としての日ソ関係の真の正常化という課題を残しており、しかも、この懸案には北方領土問題という難問が含まれているだけに、それらの重要課題が近い将来の日ソ首脳会談で解決もしくは解決へ向けての進展を見るのかどうかという期待と不安とを、いま、国民が等しく抱いているといえよう。

しかも、ゴルバチョフ書記長の一連の姿勢に見られるように、ソ連はこのところ「現実主義」の立場に立って、きわめて意欲的な外交政策を展開しはじめている。今回のウラジオストク演説にも表現され、また、その後のタライジン・ソ連第一副首相の訪中にも見られたように、今日、中ソ関係は著しく改善されつつあり、従来のソ連は何をやるにも中国に足をひっぱられてきただけに、この点でもソ連の行動余力はきわめて大きくなってきていると見なければならぬ。

にもかかわらず、わが国には、政府外務省をはじめとして、ソ連は誰が指導者になっても体質的な変化はなく、ソ連は依然として軍事的な脅威の対象でしかないといった保守的な硬直したソ連認識が根強く残っている。

このようなソ連認識に依拠して日ソ外交に臨もうとするならば、今後のソ連が投ずるであろう様々な変化球に

対応することはとてもできないであらう。そもそも日本外交は、七〇年代末期までの歴史的な中ソ対立を外交的に利用するという戦略を一切もちあわせず、もう二度と訪れることのないあの千載一遇のチャンスを見のがしてしまった。それどころか一九七八年の覇権条項入り日中平和友好条約の締結に見られるように、一方的に中国側に傾斜することによって、日本の対ソ・バーゲニング・ポジションをみずから放棄してきたのである。

それだけに、今日のソ連が、自らの発展にとって不可欠の経済改革の実現やシベリア開発の本格的な開始に当たって、わが国の経済力に大きく着目し、日ソ関係の打開なくしては、アジア・太平洋時代の開幕に対応すべきソ連の立場も閉ざされるといふ認識に立ちはじめている現在こそ、今世紀中に訪れるであろう日ソ関係打開の最後のチャンスであるかもしれない。もしも北方領土問題の解決を二十一世紀まで持ち越してしまった場合、果たして、そのときのソ連が数十年以上も経った第二次大戦の結果について、外交交渉に応ずるであろうか。このように考えると、日ソ関係は、いよいよ時間とのたたかいかにもなってきたといわねばなるまい。

今回、ゴルバチョフ書記長は「日本人は、『経済外交』と呼ばれる国際関係形成のうえでのよりダイナミックな一つの方法をもっているように思われる」と述べ、それを日ソ関係にも適用しようではないかと呼びかけている。この呼びかけは、いまや自己の肥大化した軍事戦略のコストに悩むソ連指導者の本音を吐露したものであり、わが国としてはこのようなソ連側の問題提起を受けては対応する以外に方法はないであらう。

だとすれば、懸案の領土問題についても、二島返還にまず応じて、残りの二島については再交渉、暫時凍結、共同利用もしくは共同開発、買取り等々の可能性について、様々なシナリオをつくっておかねばなるまい。

わが国は残念ながら、第二次大戦が敗北したのだという冷徹な現実を直視し、また同時に、いまや繁栄する経済大国として二十一世紀の世界を導くのだという自信をもって、懸案の解決と国内のコンセンサスづくり全力を傾けるべきであらう。

アジア調査会 だより

誌面を刷新しました!

今月号から「アジア時報」

を全面的に刷新しました。出

来栄えはいかがでしょうか。

表紙のデザインは気鋭のデ

ザイナー、藤山進さん。人類は

地球という名の「同じ船」に乗

っており、何よりも平和と共

存共栄が大切なことをイメー

ジしています。誌面のレイア

ウトも藤山さんです。

内容の特色は、まず「時評」を新設、アジア

調査会・アジア研究委の大学教授や毎日新

聞のベテラン記者らに交代で書いていただ

きます。トップバッターの中嶋教授の「時

評」は、対ソ外交に意欲を持つ中曽根首相

にぜひとも読んでいただきたいものです。

目玉商品「は世界に配置された毎日新

聞特派員によるビビッドな特派員報告

——「特派員の目」です。新聞にのらない

ホヤホヤの情報、分析、判断がファックス

やテレックスで打ちこまれてきます。アジ

調でなければできない企画だと自負してい

ます。

盛会だった日本国際政治学会の記念シン

ポジウムについては、特に本間長世東大教

授に書いていただきました。

誌面について、読者のご意見、ご叱声を
お寄せいただければ、幸いです。

好評だったソ連大使講演会

先月号でふれたソロビヨフ駐日ソ連大使

の特別講演会が、九月十七日実現しまし

た。大使が日本語で行う講演会は初めての

こと。会員の希望者が殺到したため、大き

な部屋に変更、外務省記者クラブの各社記

者やテレビカメラも駆けつけるなど熱気に

あふれる雰囲気になりました。

講演はソ連政府の公式見解が多いだけ

に、ロシア語をそのまま日本語にかえた堅

い翻訳調でした。しかし、活発な質疑応答

に入るや、大使の日本語は当意即妙、切り

返しも鋭く、日本語三十年の年季も入っ

て、まるで、ソロビヨフ（ロシア語でウ

グイスのこと）がさえずるような日本語の

巧みさに舌を巻きました。

私が重視したのは、一九七八年の園田・

グロムイコ会談で、ソ連が提案した「善隣

協力条約」について大使は「これは今でも

生きている」と答えたことです。当時、園田

外相は「領土問題を解決して平和条約を締

結することが先決で、善隣協力条約を話し

合うつもりはない」とことわっています。

来年早々予定の中曽根ゴルバチョフ会談

で、ソ連はこの善隣協力条約を再び出して

くるのではないかと——とも考えられます
が、北方領土問題を避けては通れないこと
はいうまでもありません。「領土」と「経済」
を切り離して、日ソ関係の改善をはかるう
というソ連の狙いが、よくわかりました。
今回の大使講演会は、日ソ交渉を示唆す
る重要な意味を持っています。

西暮彦氏を悼む

本会会員、西暮彦氏（元駐英大使、元外

務事務次官）が九月二十日逝去されまし

た。お悔やみ申しあげます。

（畠中）

◇ ◇

研究会 ◇九月二十日（土）アジア・ユ

ーピクス研究会例会を名古屋市の通信会館で

開き、桃山学院大教授、村上公敏氏から

「フィリピンの政治文化」についての報告

がありました。

◇九月二十四日（水）本調査会アジア研

究委員会例会を開き、青山学院大教授、寺

谷弘壬氏から「ソ連は魅惑るか」と題して、

ゴルバチョフ政権の狙いについて報告があ

り、委員との間で質疑が交わされました。

昭和45年8月3日 第3種郵便物認可 昭和61年10月1日発行 毎月1回1日発行 通巻第198号

アジア時報

ISSN 0288-0377

1986.10



The Asian Affairs Research Council

特別講演会

「ソ連の外交政策」

駐日ソ連大使 ニコライ・N・ソロビヨフ

社団法人 **アジア調査会** (毎日新聞社内)